

旅路の終りではなく

旅路の終りではなく

あ べ み つ こ
阿 部 光 子 (本名山室 光)

大正11年東京生れ。日本女子大中退。

女流文学者会，日本文芸家協会所属。

「遅い目覚めながらも」(新潮社刊)で第八回女流文学賞受賞。

現住所：東京都北多摩郡狹江町和泉3039の11



たびたび
旅路の終りではなく

昭和四十五年八月五日印刷
昭和四十五年八月十日発行

価五五〇円

著 者 阿 部 光 子

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一二(大代)
振替 東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷・株式会社金羊社 製本・共同製本所

© Mitsuko Abe, Printed in Japan 1970

目次

一粒の真珠 5

もう一つの世界 65

結婚行進曲 123

落穂拾い 159

旅路の終りではなく 177

装帧者 岡本半三

旅路の終りではなく

一粒の真珠

屑ものでさえも、何度か考え直してから処分するのに、よくもあの時、わたしは思い切りよく目の前の流れに自分の身を投じたものだった。しかもその流れはためらいもせず、わたしをこの岸に上げてしまったのだ。

支那事変は大東亜戦争へ発展し、わたしたちの住んでいる町のつい隣近所にも、応召する人々が次々に出た。

「身を鴻毛こうもうの軽きに比し」と、その人々が門出に際して挨拶する印刷されたような文句を、うっかりとわたしは自分の上に取り入れてしまったのだろうか。

「どうして、ああいう結婚をなすったのですか」とよく人にきかれるのだが、わたし自身も実はよく分らない。強いて言うくと、長年、可愛がっていた飼犬に死なれ、落胆し切っている時だったから、子どもが二人いるという結婚の条件もそう苦にはならなかった。それどころか、いくら可愛がっても十年かそこらで死んでしまふ犬よりは、人間の子のほうが、可愛がり甲斐があると、それは本気で思ったのだ。

ところがその話をする、聞く相手は必ずご冗談をといって笑った。あまりその都度、笑われ

ると、しまいにはわたしも自信をなくし、そうするとこれはどうも冗談かもしれないと思うようになった。

たいへん意地の悪い人は、あれは小説のたね探しに結婚するのだと言った。しかし、たね探しならもっと肥えた土地がある。論より証拠、結婚して二十年近く、わたしはろくな小説が書けなかった。たね探しをするどころではなかったのだ。

何はともかく、区役所の結婚届には、理由を書く欄もなかったから、わたしはどうやら無事結婚した。わたしの結婚を一番喜んでくれたのはわたしの嫂おにょうめだった。かの女はその時、肺を病んでいて、病状はかなり悪かった。その日も式の間じゅう席にいることは堪えられないが、わたしの花嫁姿だけは見ておきたいといって、わざわざ式場である岡の上の教会までついて来てくれた。

防空用の服装はしなくても、いざという時の用意に携帯していればよいという時代であったが、自動車の確保はむつかしく、わたしたちは平常着で教会へ行つて、そこで着替えをしようということになっていた。嫂は息切れを押えるために、ゆっくりと歩いてしたが、案外うまく坂を登り終えたのでにっこりして、

「その箱、わたしにもちょっと抱かせて頂戴」

と、わたしの抱えていた花嫁衣裳の這入っている洋服箱に手をかけた。

控室で嫂や親戚の人々に手伝つて貰つて、わたしが白いドレスを着ていると、嫂の養母になるピアノの先生が現われ、挨拶もそこそこにわたしの背中をトンと叩いて言った。

「あなたは謙遜のつもりで背中をこごめていらっしゃるが、外国ではそれはお行儀の悪い姿勢な

のですよ」

かの女は明治十年代の生れだが、音楽の勉強のためアメリカに留学したことのある独身の女性で、父に死に別れた姪を引きとって養女にした、その養女がわたしの嫂なのだ。嫂は明るい性格でよくわたしとおしゃべりしたが、結婚したことのない女性を母として、育った辛さを一度も言ったことがなかった。まして、わたしの結婚する家に、三人の女性の独身者がいることについても、とやかくと軽薄な口はきかなかった。無責任な友人たちは小姑鬼千匹というけれども、それが揃いも揃ったオールド・ミスでは、鬼一万匹よ、それに三をかけたら——などとはつまらない計算をしてくれたりした。しかし、考えてみれば、わたしだって、三十歳近い老嬢だった。勝手気儘なことをした上に、小説まで書き始め、縁談の世話でやっきになっていた嫂をたいへん落胆させたりしていた。——あんまりすごい小説書かないでね。それから、ペンネームを使って下さいな——嫂はそんなことを言いながら、小姑であるわたしの結婚に熱心になりすぎて、鬼千匹を追いつ出した下心があるのかと邪推されはしないかと、気を遣う様子だった。

それやこれやを思えば、わたしは、何ひとつ、偉そうなことを言えた義理ではなかった。この年になってわたしが老嬢の国を脱出するからといって、それが何だろう。また、夫になる人の姉妹が、それぞれ、信念を持って、老嬢の国に踏みとどまっているからといって、わたしに何の批判ができるだろう。わたしが今日、白いドレスを着るのだって、わたしの功績ではない、嫂を初め沢山の人の手柄なのだ。

それにしても、背中を叩かれた痛さは——かの女は長年きたえた指に弾みをつけて、フォルテ

で叩いたのだ——わたしに更にいろいろなことを考えさせた。

わたしの夫になる人の姉妹は、嫂の養母と同様、それぞれ外国に留学したことのある人々だから、わたしの背中をまげる癖や、大笑いをしすぎる癖について、表面に出さなくても、背中を叩いていました。めたい気になるであらうと思ひ、わたしは少しばかり気おくれがした。

新婚旅行に行けば行かれない時だったが、予算がなかったのだと思う。わたしたちは式場からまっすぐ夫の家へ行った。夫の家といっても、彼の亡くなった父の住居で、二階には夫の三人の姉妹の部屋と、夫の先妻の娘で四歳になる子の部屋があり、階下の奥まった和室の八畳がわたしたちの部屋で、そこから鉤の手に折れた廊下の先に、六歳になる息子の部屋があるという具合であった。口さがない人々は、この家をアパートと呼んでいたが、すべての部屋が廊下で仕切られた個室であるだけでなく、住人が老いも若きもそれぞれ孤高の精神を持っているからだという。

夫の父は、ある国際的なキリスト教の社会事業団体の、日本での基礎を築いた人で、亡くなるまでその会の会長であった。彼は、各方面からの喜捨で経営しているこの会の会長として、私有財産を持つていては相すまないというので、著書の印税はもとより、家屋もすべて会の所有にしてあったから、葬式も香奠でまかない、墓も有志の寄附で建てるという次第であった。

会長というものは、巨額の寄附金を集めたり、会のために夜も寝ずに働いた上に、会から金を出す必要もない、まことに重宝な存在であると、肝に銘じている会の幹部たちは、その会長の遺志を重んじて、会の所有になっている会長の住居から、遺族に一日も早く立退いて貰い、そこを

会長の記念事業として、問題児を収容する寮にしようと計画していた。寮にするにはうってつけの間取りであった。

しかし、亡くなった会長が、公を重んじて、私事を軽く見たからといって、その公、つまり会自身が、会長の私事、遺族たちを軽くみるのは、常識的に言っておかしい気がするが、この世界ではそれをおかしいというのが信仰のないやしむべきこととされていた。

むしろ、遺族たちは奮起して、故会長にならない、あちこちから寄附金を集め、この事業を進めるための活動をし、昼夜分たず働くべきであって、どうやら、その活動において、遺族たちが故会長に遙かに劣るのは恥ずべきことであると、会の後継者は理の当然のように考えていた。従って記念寮とすべき会長の住居に、恋々と居坐るときは、遺族として最大の恥辱とされていた。その家の食堂を出て、風呂場に入る廊下の壁に、電話機のあった痕跡があり、取り去られて、かなりの時が経過している様子にも、会長の死後、三年を経ていることや、すでに遺族の居住権は消失していることを示していた。

それにしても創立者であり、死ぬまで五十余年、一筋にその事業のために働きつづけた人の、しかもその遺業に参加している遺族たちの住居から、亡くなった会長の公の器具であったという理由で電話機を取り去ってある事実は、生易しい状態でないことを、新入者のわたしにも暗示していた。

もともと、当時は、その会にとって最悪の時であった。会長は亡くなり、又たとえ生きていたとしてもどうにもならない戦時下の暗雲が会の上にもおおいかぶさっていた。会そのものは国際

的な団体であるからといって解散を命じられ、個々の施設が、国の統制のもとに存続を許されている状態であった。会の本部の会館も軍部に取上げられ、連絡機関としての本部が一つの施設の中に間借り事務所を持っている有様で、会長のデスクやファイルなどは置場がないままに、この家の書庫に積み重ねられてあった。

どの国際的な団体もそうであったが、この会はキリスト教の色彩は濃厚だし、米英とのつながりも深いので、幹部たちはスパイ容疑で憲兵隊に召喚されて取調べを受けた。その幹部たちがたいへん節操のない供述をしたことは有名で、わたしの友人で新聞社に勤めている人から、亡くなった会長は後継者の養成に手ぬかりがあったという評判よ。多分、甘やかしすぎたのじゃない——と知らせてくれた。その調子で甘やかされたに相違ない会長の長男と結婚するわたしの無謀をいさめ、決心をひるがえさせるためであった。

結婚するなど言ったのはかの女ばかりではなかった。わたしの女学校の先生のひとり、ほんとうに取るものも取りあえずという形でわたしの家に飛びこんで来て、母と長い間、話し合っていた。この先生はわたしが結婚すると決意した家の近所に長く住んでいたもので、余りにも浮世離れのした家庭と、その下敷となって五十何歳かであけて死んだ会長夫人——わたしの夫になる人の継母——と、その看護疲れでウィルス氏病こまじまというめったにない病気で死んだ長男夫人——つまりわたしの夫になる人の先妻——のことを細々と語り、そのあとに入るなどとは飛んでもないとだと言った。先生が帰られたあと、

「殺されますよとさえ、おっしゃるのだがね」

と、さすがの母も愁い顔で言った。

会長の出生地が、母の郷里から少し山奥であつたので、かねがね、母は会長のことをお国自慢のひとつにしていた。会長が十八歳の時、十三歳だった母が、郷里の教会で彼の話を聞いたということは、聞き飽きるほどわたしも聞かされていた。

「すばらしいお話だったね。外の先生方のお話の時には、窓の外に鳥が飛んだり、雲が流れたりしたが、あの先生のお話の間、何も見えず、何も聞えなかったものだよ」

母はその目をきっかけにクリスチャンになる決意をしたというのだ。自分の一生で何が仕合せだったかといつてクリスチャンになったことが一番仕合せだったと思うにつけ、あの先生はわたしの恩人だともよく言った。

母はまた、自分の友人だった、会長の初めの夫人のことを稀にみる立派な人だと言っていた。後年の写真にあるような女丈夫然とした人ではなく、若い頃は楚楚とした、いつも目が涙で濡れて、内側に灯のともっているような人だったとも言っていた。

会長のキリスト教は、貧しい人々の中に飛びこんでいく実践的なものだった。わたしの母にはその勇氣はとてもなかったから、その実践を敢えてした友人を一方ならず尊敬していたわけだった。

わたしのそれまでの縁談に対して、恐ろしく批判的であつた母が、この、他人は殺されますとさえいう縁談に対して、初めから乗り気になつたのはこういう下地があつたからだ。親戚の人々も、母の態度には驚き、変り者とは思っていたが、度を越している。家相でも悪いのじゃない。

いか——と噂したりした。

母は、誰が何といつてもねえと微笑して、

「祈りの子は滅びずというだろう。あの先生とあの奥さんとの子に、そうまちがった子が育つ訳がない」と言い、それからなおも笑顔で言った。

「あの先生が生きていらっしやるとね。わたしのことだって、覚えていて下さる筈だ。わたしが大阪の女学校に行く時は、汽車がないから舟で川を下って海に出て、海路、大阪に行くのだった。そんな旅を娘たちだけでするのは危険だから、よい連れを探して貰うことになっていたが、ある夏休みの終りに、京都の同志社へ行く学生のグループと一緒にいくことになったら、その中に、あの先生がいらしたのだよ。舟の中で下品な中年男がわたしたち女学生をからかい出したら、すかさず先生が間に這入ってほかの話を始めて下さったので嬉しかった。あの時の女学生がわたくしですと申し上げたら、きつと思ひ出して下さったに違いない」

こたつの向うでぼつぼつそんな事をしゃべっている母の髪の毛は殆ど白かった。父が亡くなつて七年たっている。上の子はみな片づいていたが、わたしと末の弟とが母の荷になっていた。弟は美術学校の彫刻科を出たが、すぐ応召して満州へやられていた。母の隠居所の隣に建てられた弟のアトリエは、騎馬の銅像も造れるだけの大きさにしてあったが、いくつかの習作が置かれたまま、がらんとしていた。知合いの人々は疎開荷物を入れさせてくれと申出ていた。

母も心細いのだろう——突然、わたしはそう思い、よし、承諾しようと決心したのだった。その結果として、新婚旅行もできず、三人の独身の女性と、二人の子どもと、ふくれっ面をした女